

知多

洗浄機でポリ袋を資源に

食品工場などから大量に廃棄される汚れたポリ袋。これらを洗浄、脱水することでリサイクル可能な資源に変える機械を開発した。「例えば一キ四十円かかる処分の経費が一キ一円の利益になる」。間瀬隆夫社長(左)は機械導入のメリットをこう強調する。

マヨネーズや生クリームなどの汚れをたたきと振動で浮かし、水を吹き付けながら高速回転する翼の摩擦と遠心力で洗い落とす。ポリ袋一枚にかかる時間は二秒。使う水はわずかで洗剤は要らない。仕

わがまち 企業 最前線

カネミヤ (半田市)



汚れたポリ袋をリサイクル可能な資源に変える洗浄機＝半田市八軒町の本社で

様を変えれば紙パックにも対応できる。大手食品メーカーが相次いで導入、ごみの分別機と合わせて百八十台の販売実績を誇る。

カネミヤの創業は一九八九年。「脱サラ」した間瀬社長が故郷の半田市で機械メーカーの下請けとして興した。業績は好調だったが、二〇〇〇

年代初頭にITバブルが崩壊。半導体不況のおおりで売り上げはわずか一割ほどに落ち込んだ。

「もつかるリサイクル」をいかに知ってもらおうか。工場見学に力を入れたり、展示会へ積極的に出向いたり。会社のホームページも一新した。昨年十二月には洗浄力を大幅に高めた新型機を発売した。「品質はベストセールスマ

経営が揺らぐ中、自社製品の開発を決意した間瀬社長の頭に浮かんだのは、ナノテク、バイオ、環境という時代のキーワード。「ナノテク、バイオは分らないが、環境なら」。開発に着手してから二年後、洗浄機の商品化にこぎつけた。

「品質はベストセールスマ」が社員の合言葉だ。製品の品質を高めれば、販売台数は増える。製品が売れば、限りある資源を有効に活用できる。間瀬社長は「リサイクルをお手伝いすることで社会と地球環境に貢献したい」と力を込める。

洗浄後のポリ袋を引き取るルートも確立。洗浄機は順調な売れ行きを見た。県ブランド企業や経済産業省の「元気なモノづくり中小企業二百社」に認定されるなど、さまざまな賞も受けた。

「山本真土」

メモ 資本金2500万円、従業員20人。本社は半田市八軒町。電0569(23)2871。神奈川県中井町に関東営業所、米カリフォルニア州に総代理店がある。社名は「頑張ろう 粘り強く みんなで やるぞ」の頭文字に由来する。

成
春

ニュー
社

052-23

E
shakai@

半田支局
半田市出

0569-21-

中部空港支局

常滑市セ

0569-38-

東海通信局

0562-32-

大府通信局

0562-46-

常滑通信局

0569-35-

内海通信部

0569-62-

中日新聞

読者

052-221-08

E

center@